

星に願いを

Yuki Shohei

「おはなしするね。」

私はね。

ハッピーエンドが好きだ。

だからこのお話は必ず。

たとえ共に長い道を歩くことになっても。

必ずハッピーエンドにしたい。

ちよつと険しいが一緒に登ってはくれないだろうか。

だから。勝手にだけれど。

あなたを。君を信用して。お話しをしたい。

大丈夫。勝手に信じたくせに勝手に裏切られたとか。

私は思わないから。

お話しをさせてください。

例えば。

教会に行つて、罪を告白しただけで許されるのなら。

私は死ぬまでそこで暮らそう。

許されたいという望みはきつと。

必要な感情なんだと思う。

だから無駄にはしないために

私は許される事よりも心の中で悩み続ける事にした。

そうして、自分じゃない誰かがいてくれたら。

それを話してみよう。

恐らく。

多分。

傲慢も貪欲も淫蕩も悲嘆も憤怒も怠惰も虚栄心も。

いつかはきつと。

許されないのだけれど、感覚は薄れていくだろう。

私はね。それを救いだというにはとても惜しい気がしてならない。
私はどんな感覚も大事に大切にしたい。

それは自分だけに与えられた

あるいは自分だけが感じる事ができる。

難しい比喩が許されるのなら。対話の彼岸だからだ。

そこでは善悪では語るこのできない。

救いではないのだけれど。

徹底的で無慈悲でもあるのだけれど。

人だから感じる事ができる創造上での平穩がある。

信仰は悪いものではないと思う。

けれど世の中にはたくさんありすぎて。

わかっていた事だけれど。わからない事が続く。

今なお続いている。

それは。

——ああ。きつと。

とてもじゃないが私には解けないと思った。

とてもじゃないけれど、自分じゃ無理だと思った。

世の中には理不尽がある。

今。私が起こすものなら。すぐに謝ろう。

だって私はできる事であるならば。

人に優しい人間になりたいからだ。

私は人を傷つけない人になりたい。

でも相当の精神苦を体験するはずだ。

だって何もしない事が一番なんだから。

だから落ち着いて落ち着いて。言葉を探す。

少しでも自分が好きだからだ。

それでも。誰であっても人の幸せまで願ってもいいはずだ。

嫌がるであろう相手なら黙ってそう思っていればいいのだ。

自分とは相性が悪い人でも。
ただ自分とだけ相性が悪いのだろうから。
距離をとればいい。

でもね。

私はとても悲しい事だと思う。

自戒で済ますことはできない。

人を巻き込んでおいて自己完結させて終わりだなんて。

こんなの大した認識のズレだ。

また出会える可能性はあるんだから。

捨ててはいけないのだと思うから。

それにとっても同じだと思う。

忘れる事と実は何もできなかった事実。

だから事実を正しく知る事でしか人は救われないのだと思う。
物語は優しい。とてもとても優しい世界だ。

決して自分に危害を加える事はない。

けれど私たちは多分そこにいるような。

その世界に存在する人にはなれない。

そこには罪を背負う作業がない。

そうして道は作られたものをなぞるだけなんだとしても。

現存の人と話した時の安堵や安心とか

心に残った大切な記憶には絶対に勝てない。

その人の世界がいかに広大かというような。

想像でのみ理解できる。

その人を強く想う時みたいなの。

本当の優しい気持ちにはなれない。

自分を柔らかくして、柔らかくして。

辛い事や悲しい事を。

唯一自分の気持ちを自分の力で正しさを求め伝える事ができる、大切な言葉、を。

きつといつかの記憶で知っている。

人を信じる事。

そうして裏切られる事。
この道を知っている。

行き場のない記憶を知っている。
ただなにもない平原で。本当にただただ独りで頭を下げ歩く。

考えて結果を出すためじゃない。

ただその人の事を考えて悩むための時間で歩く。
いつか今までどれだけの絶望があっただろうか。

地獄とは何かを私は知っている。

井の中の蛙は。大海こそ知らなかったが。

その深さは知ることができそうだ。

これは私の言葉じゃないけれどね。

でもね。

わかるのだ。

私だけの感覚じゃないと。

私だけが見た絶望と地獄じゃないと。

なんとなく。

そう思うのだ。

それはそうじゃないと困るわけじゃなくて。

良い事しか起きない人生なんて。

あたり前のようにないのだからだ。

たくさんの人が物語が好きだ。

一緒に怒ったり泣いたり。笑ったり。喜んだりできる。

共有できるようにするために。

創る人が一生懸命だからだ。

本当の世界ではないけれど。

たとえ一時でも一緒に道を歩めるのなら。

それだけでは何もかもままならないのだけれど。

もちろん。

物語を創る人さえもままならないのだけれど。

そこにはほんのわずかな。
わかり合える気持ちがある。

そうして。ほんの少しだけれど。

人間はそれぞれ全く別々の動物なんだけれど。
それを頼りに。

共有の松明みたいにして。

夜を照らす。

そうして夜でも昼でも少しだけ一緒に居よう。

今それができているわけだから。

きつと私も。

あなたも。

君も。

どんな人でも。

一緒に過ごした事実だけでもいいから大切にしよう。

それは決められた箱庭だったけれど。

そうじゃない。

いるじゃないか。遠くの人が。未来の技術で。

光で。音で。近くにいるみたいに。

そうでなければ。

私はきつと人と暮らしてはいけないから。

少しだけおんなじ部分を。

とつてもとつても。

大切にして生きることにした。

これは私の場合だけれど。

おはよう。

おやすみなさい。

またね。

こんな簡単な挨拶だけを私たちは交わして。
またそれぞれの道をゆく。

本当に続く。

どこかで大切にしていた。自分の道をゆく。

巡礼のような時間。

でもあなたと今まで一緒に使っていた松明は
消さないで持つていくことにしたよ。

とても大切なものだし。証だと思っているから。

そうしてこのお話は終わる。

けれど。続く。

世界は私が歩き回れる庭ほど小さくないから。
歩く。

また会えるといいね。

世界はこんなにも広いけれど。

なんの約束もしていないけれど。

また会えるような気がして。

私のお話は。

ここでおしまい。

この世界で。

また会えるとなんとなく。

そんなおかしな気持ちになつて。

それじゃあ。

またいつか。

どこかで。

「世界は美しく、美しくーダイアローグー」

うさぎとかめがある時かけっこで

山のとっぺんまで競争する事にしました。

うさぎは一瞬で遠くまで駆けていきました。

かめは地道に一步一步進みます。

うさぎはそりやなんたつて、機敏ですからね。

とてもすばしっこいのです。

かめは身体の関係でそんなに速く走る事ができません。

うさぎは昔の言い伝えであつた事を知っていたので

途中でいくつも休もうかなと思つたのですが

休まず山のとっぺんにつきました。

それはもうあつというまででした。

一方、かめも同じく昔の言い伝えを知っていたので、

悔しいなと思ひながら。

わからない結果のために山のとっぺんまで進み続ける事にしました。

うさぎは山からの景色を少し一望したそのすぐあと、

かめのところへ走りました。

うさぎにとつてこの競争自体はとてもたやすい事でしたので

やはりあつという間に亀のところにつきました。

かめは少しの声で言います。

「手を貸さないでほしい。」

うさぎも少しの言葉で応じます。

「そっだね。わかつた。」

うさぎとかめは何日かをかけて

あの山のとっぺんにつきました。

うさぎは言います。

「これを見せたかつた。」

かめは応えます。

「何度も見たくないと思った。けれど。君がいた。
この景色を忘れたりしない。」

歴史の教訓というのは。

少しだけ大事だとわかっていればとても役に立つのです。

ある時には。

人間だと名乗る鶴が恩返しにきました。

おじいさんとおばあさんは子供ができたように喜びました。

鶴は、一つだけ約束をしました。

夜。何か音がしてもふすまをあけないでほしいと。

おじいさんとおばあさんは昔の言い伝えもありましたし
何よりそんな事はどうでもいいくらい

人間の子供ができたと喜んでいましたから

決してふすまをあけませんでした。

季節が何度も何度も変わりました。

ある寒い日に鶴は何も言わずに一切を理解して

おじいさんとおばあさんに

小さなかすれる声で泣きながら

「ごめんなさい。」と言って

その翼で大きく空を舞っていきました。

おじいさんとおばあさんは

その声を同じく泣きながら聞いていましたが。

それでもふすまも玄関の扉もあけませんでした。

はじめからこうなるということはわかっていましたが

それでも嬉しかったから、喜んでいたから。

鶴の事をいつまでも人間だと心の底から信じていました。
それはいつまでも続きました。

ある時です。

みんながおながが空くという夢を見たその次の日の学校でみんなが持つている食事を持ち合い分かち合いました。でもどうしてある時にそんな事が起きたかいつまでもわかりませんでした。

いろんな神様はなぜか秘密が好きになり、それを信じる人達も秘密が好きになったり。いつの時代もどこにでも仙人のような人がいて自分の役割を熟知したため。

ひっそり生きてひっそり死んで。
神様や仙人にとってはそれでよかったです。

ああ、世界は美しくなる。

美しくなればいい。
もつともつと四季を告げる鳥も花も木々も。
とてもとても美しく。
海は穏やかにおしてはかえすゆりかごで。
その浜辺で恋人どうしはただ静かに聞いているだけ。

なんだ。

ああ、そうか。
救いも奇蹟もなにもかもつまっていた。
一人に一つだけ正解がわかつていればそれでよかつたんじゃないか。
科学の力だけで世界はこんなに美しくはなれないが
私達には科学が必要で。優劣なく。
火が暖かければ暖かいねと言い合える兄弟がいればよく。
一人であつてもそれはどうであれ。
独りになろうとも孤独が来た事を受け入れる世界もあり。
あるとき目が覚めたら世界あたり一面が黄金に輝いて。
宙を浮く自分に驚いて。

いつか、いつか。

誰もが自分はどんな形であれど

眠くて眠くてしかたがなくなる事がわかって。

だからそれを早める事も遅らせる事も良しとせず生きる。

これをきつと人生と言って。

なにもがない時に悲しいというのは私も悲しいとか。

そういう気持ちと同じであるとか。

ほんの少しのおんなじところを知っているから。

人間は他の人間をおんなじわかでとらえて

仲良くできたりその逆もあつたりして。

美しくあれと願う気持ちが少しでも星に届けばいい。

どの星であれども届けばいい。

向こうの星の推定人類も。

きつとそう思ってくれている事だろうとなんとなく思つて。

いつも、いつも、瞬きの間になくなつてしまふから気がつかなかった。

ああ、本当にいつも、いつも。

世界は始まりから終わりまで美しく、美しく。

生きる時間も年老いていく過程も美しく、美しく。

「星に願いを」

——ああ、綺麗。星が砕けて砕けてソラから地上に落ちるのは、とてもとても美しい。これは何十年かに一度の流星群だそうだ。

今世紀最大の。史上初の。歴史上類を見ないほどの。こういった類のうたい文句には正直飽きていたところだ。

ああ、でもこんな生まれてはじめてだわ。

リリカルな表現が思いつかないので

有体に言うなら、流れ星がとっても綺麗です。

私は宇宙服を着込んでヘルメット越しに

片腕の酸素残量を見つめる。

ああそっか。あとちよつとなんだね。

溜息すらもつたいないので、我慢我慢。

こういう時、楽天的でユーモアがわかる友人が近くにいないのが残念だ。

現在、西暦を終えて数年たった人類は月での生活を始めていた。

最初は歴史の遺産？

古い言葉でレガシーというのかしら？

月の土地の権利書で人類はすつこくもめた。

そのあと権利書はゼーんぶ国が買い取りました。

そんなこんなでもーつともーつと混乱しましたとさ。

それからというもの、人類はやっぱり人類として

前の惑星から月に変わつても同じでした。

そう学校の教科書に書いてあった。

歴史の教訓というのは

少しは活かされたけど少しも活かされなかったのね。

月の地上で生活するには市民権が必要だ。

そうでないものは地下へと流れる。

市民権は功績を称えられて手に入れることができる。

一部の特権階級を除いて、良い事をすれば市民権は得られる。

もちろん失う事もあるのだけれど、普通はない。

真面目で善人しか市民権は得られない。

だつて遺伝子の戦いによる決着はもうここまできているのだもの。
効率を重視したAI搭載のロボットに仕事を奪われた結果とも言える。
そうやってシステムティックに人類は計算されて配置された世界で。
ある日突然。

そうね。

あなたたちにとつては、ある日突然のことではなかったのよね。
地下に住む住人達の大規模な暴動が起きた。

たった24時間で2割の人間が築きあげた文明を、8割の人間にこなごなにされた。

ああ、そっか。うん。

きつと。きつとこういう考え方が私たちはよくなかったのかな。
人間を数で一つにまとめるなんて。

そんなんだから私たち失敗しちゃったんだね。

ソラを見上げるとやっぱり星が綺麗だ。

さーつと、暗闇を駆け抜ける光。

それが短時間でいっぱい。

私。今ので幸せ使い切っちゃったかも。

うん。

今のはジョークとしてはいまいちかもしれない。

ユーモアがわかる友達が近くにいってくればなあ。

この辺りは地層の関係で爆発は少ない。

月のお家は距離が離れているかわりにレールが通っている。

その上を車輪の上に大きい箱を載せた

旧文明では路面電車というのが走っているのだ。

もちろん宇宙服を着て。

なんで路面電車なんて古い言いまわしを知っているかというと。

実は私。歴史学者なのです。

今のはジョークではないけれど、ユーモアはあったと思う。

でも笑つてくれる人はもういない。

あとはお察しの通り命からがら大きい箱から

たまたま乗り込んだところで起きたテロから急いで脱出。

何もこんな日に、星がこんなにも降る夜に。

静かな静かな宇宙で、やらなくたつていいじゃない。

何十年かに一度の流星群が流れているのよ。

なんて事を思いながら、仕事をこなす。

私の使命は後世に歴史を残すこと。

どんなにひどい歴史でも、私は残します。

それが芽になるかもしれないから。

もう少し、もう少し。

入力している。ペンで数式を書いて。

腕が疲れたらソラを眺めて。

あとちよつとで酸素欠乏症で死ぬのに。

少しでも書けたらそれでいいの。私の肉体は滅んでも

私の精神は決して、こんなことでは滅ばない。

私は私の万感の思いをまとめあげて練りこんで。

……もしかしたら今の私は狂気の域かもしれない。

酸素が少ないとさつきからアラムが鳴り響いている。

うるさいなあ。目なら覚めてる。意識も大丈夫。

これが人生の最後なんだから好きにやらせてほしいものだ。

歴史学者はもう私しかないのよ。

最後に1文字と短い数式を書き込む。

——っ。

タブレットをアタッシユケースに入れて。ロックをかける。

ああ、やり終えたのね。私。

あと何分だろうか。何秒だろうか。

お願い。

ちよつとだけでいいから、

ゆつくりこの綺麗な流星群を眺めさせて。

「祈り」

ハゲワシと少女。有名な一枚の写真がある。
あの写真とおんなじような地域の
どこにでもあつてはいけないけれど
どこにでもある紛争地帯のお話。

どこにでもいる少女が、か細い祈りを捧げたけれど
全部裏切られてしまったお話。
少女はそこにいた、年端もいかない子供だ。
少女はぼろ布をまとっていた。
けれども信心深さは誰よりもあつた。

戦争屋が安上りの銃弾と兵器を売りさばき。
少女は運悪くそれを担いで構えて訓練をして
隊列を組んで、武装していた。
少女には同じ運悪く似たような境遇の友達がいた。
男の子でも女の子でも、その日のデザート
チョコのかけらが少し多かつたとか

そんなちよつとのことでも真剣に大笑いした。

ある日少女はまたしても運悪く大人たちの言う
ムズカシイ作戦に参加させられた。
理由なんかどうだつていい。
ちよつと足が遅いとか。

ごはんを食べるのが遅いとか。
銃の組み立てが遅いとか。

作戦ははじめからうまくいく算段がついたものではなかつた。
音が先なのか光が先なのか
もの凄い爆発のあと少女ははぐれた。
戦場において隊列からはぐれ
隊長の指示を仰げないということとは

直結してこれから死ぬということを表す。
銃弾の連続した素早い音に恐怖した。

しかしなによりも恐怖したのは何もできないということだ。
そして何も救ってくれやしなかった神様への気持ちに絶望した。
その時少女の信仰が死んだ。

すべてを頼って、いつかなんとかなると思った。
だつて私が死ぬはずないもの。

だつて私は私なのよ。死ぬつてどうということ、
殺してしまうつてどうということ。

どうして争うの。どうして戦わなきゃいけないの。
私になにをしたつていうの。

彼女はより長く生きながらえるために
それを心の中でさんざんわめいた。

——ああ、神様。どうか私を助けてください。
鉄が鳴り石が砕ける音が近づいた。

ここまでが全部裏切られてしまったところまでのお話。
お話には続きがある。

そして少女は為す術なくガタガタ震えながら銃を握りしめた。

「チヨコレート。」

カタコトの私知っている言葉で話しかけられた。
意味がわからなかったし。い

いつ死ぬかわからない事に戦慄しきっていた。
「チヨコレート。タベル。」

敵だつて聞いていた兵隊がとつてもぎこちない笑顔でそういつている。

ああ、チヨコレート。

多いか少ないかそんなことで騒いでいたチヨコレート。
そのチヨコレートを受け取ったかわりに銃を捨てた私は今。
大学でどうやったら平和な世界にできるか

学問の道に進んでいる。

唐突だけど、私はそれはもう文字の書き方から言葉通り死にも狂いで勉強した。

だって私は知っているもの。戦争がいけないことだってきつと、神様はいるんだと思う。

私の知っている神様は私にチヨコレートをくれたもの。

神様は私に人間の御遣いをくださったんだと思う。

みんな悲しい終わりを迎えてしまったけれど。

そのみんなに一つずつ花をそえるような

意味を与えていきたいから。

だから私のお話はまだ続く。

道のりは険しいけれど、まだ続く。

神様。

どうかお願いします。

平和な世界を。

祈りが届きますように。

「世界は素晴らしい」

世界は残酷だ。

しかしそれゆえにきつと戦う価値があるんだと思う。

私は学問の道にすすみ、私の友達死んでしまった。

花には花言葉という、二つ目の意味があるという。

それならばたまたま運悪く命を奪われてしまった私の友達、死に。

二つ目の意味を与える事はできないだろうか。

きつと平和のために、私が運良くできることはこれしかないんだと思う。だから私は学問の道で今度は銃をとらずに戦う必要があるのだと思う。

世界は素晴らしい。それゆえにきつと戦う価値がある。

最初に文字を教わった時、私はミミズが紙の上を這っているとか。
なにかの汚れたとか本気でそう思った。

最初に本を読んだ時、そこに描かれていた世界が壮大である事に涙をこぼした。
最初に勉強をした時、わからないということがわからなかった。

最初に学校に行った時、すつごく緊張した。

最初に試験を受けた時、ほとんど解けない事が悔しかった。

初めて勉強で友達と競って

初めて友達よりも成績が良くて。

初めて先生に褒められた。

そして私はどんどん勉強が好きになって、

ある日先生に飛び級をすすめられた。

孤児院では、それはそれはとても珍しいことだって騒いで。

まわりの驚きように私はすつごく驚いた。

そして私にとってはすべてが新鮮ですべてが色鮮やかで。

そのすべてがとてもとても美しかった。

私にはやらなくてはならない事がある。

私には学校に行く前にも友達がいた。

今はもういない友達のために、その友達の分までなにがなんでも
平和な世界の実現を目指す必要があるからだ。
もう、私たちのようにお金に困った親が子供たちを軍隊に売らない。

そんな世界の実現のため
いまでも私はこの身を神に捧げているつもりだ。

しかし未だ世界は暗く地獄はそこらへんにあって天国への階段は見あたらぬ。
イギリスのとある大学に入った私はNPOの設立準備をすすめながら主席で卒業。大
学院に進学した私は国際情勢と哲学を学び。
そのまま国際平和にむけて研究者として、とあるセンターで研究員をしている。

一歩一歩。

過去の自分に後悔をすることすらできない程の圧倒的時間を
世界平和のために注いでいる。

私はみんなの人生を背負っている。
その気持ちでいっぱいだ。

ある日、実地での研究調査としてとある中東の村にきていた。
少年に案内をされてあたりをまわる。
少年と、ある事がきっかけで仲良くなり、
とつておきの場所へ連れていってくれるといわれた。

そこは急峻な高い崖で上から村を一望できる場所だ。
上空では一羽の鷹が飛んでいる。

あの鷹を目で追うと自然。見下ろす形になる。
ここは最初に本で読んだ世界よりもとても広大だった。
村の建物はとても小さく点在し、遠くでは山々が緑に生い茂る。
さらに裏側では地平線に近い水平線がどこまでもどこまでも遠く広がる。

こんなにも人々がいて、こんなにもその人の世界があつて。
私が守らなくてはいけないのは、きっと生きている人の世界の方だ。

自然と涙が流れた。

少年は私を見て齒をだして笑っている。

ああ、世界はやっぱり残酷だ。しかしそれゆえにきつと戦う価値があるんだと思う。世界はやっぱり素晴らしい。だからそれゆえにきつと戦う価値がある。

「ハローワールド」

——私の世界は二つある。

世界の始まりは過去から演繹し、現在を視る認知の慧眼。そして、もう一つ。私は未来が解る。未来を見通す千里眼。地球の隅から隅へ。余すところなく。

例えばあの九龍城がどういった構造になっていたか。

私にはすべて理解できる。

言及を求められるのなら

そこに任んでいた一人一人の健康状態とかまで。

未来も簡単だ。

高い高い塔の上から羽を落としたその後にはすぎないのだから。そのあらゆる可能性。

データがあれば一瞬で計測と観測が可能なのだ。

私の脳は特別性。一部電化製品。

所謂サイボーグ。

なんでもはできないけれど簡単な奇蹟は起こすことができる。イギリスの田舎町で催すお祭りをたまたま観た。

そんなの衛星が何千何万と浮遊しているのだからできて当然。

先を視てしまった。

あの小つちやい女の子がアイスクリームを落とすまで、実に10秒。

落下時間は1秒以下。

鼻屑をした時、私はすこしだけズルをする。

「このアイスクリームは落ちない。」

ちよつとだけ女の子に暗示をかける。

こんなものが奇蹟なのか、私自身は気に留めてはいないが
いまでは私も周りもこの力を奇蹟と呼んでいる。

未来。

あと3時間で地球はちよつとした喧嘩で滅ぶ。

大国と大国とそれからまた大国と。

地球を100回はオーバーキルできるほどの爆発で、連鎖的に、向こう50年は人が住めない星になる。

それがどれほどひどいことになるのか。

こういうのはあくまで個人の想像力の問題だけど。

それだけは、決してあつてはならないこと。

私。実はそんな事を止めるのがお仕事だったりします。

所属は世界。

秘密結社とか。そんなところ。

莫大な資本金はあつてもお金だけで戦争は止められませんでした。

戦争や争いとは。人が人である以上、原理的な自然行動なのです。

——それでも。私の命がこの仕事によつて台無しになるかもしれないとも。

この賭けによつて世界が一度でも救えるほどの奇蹟を起こせるかもしれないなら。私はそれでいい。

そう。私はきつと死ぬ。

データが増え続け脳がキヤパを超えたら、

一部電化製品の脳みそが焼き切れる。

——やつぱり。怖いなあ。

一瞬の葛藤が過ぎつた。けれども、時間はない。

世界人口70億人の行動を予知し、不確実性に介入。

3段階のバックアップを準備。

秘密結社のチームは慌ただしく

ふとみんな何をしているだろうかと気になった。

ピーターはコーヒーをこぼしてタブレットを壊すだろう。

なので原因修正。

「ピーターはコーヒーを欲しがらない。」

暗示完了。

ああ、音が静かだ。

針が地面に落ちる音が聞こえるほど。透明な透き通る世界。統計よりデータが増える傾向分析。

あと10分で脳死する。

どうにか。

どうにか世界を。

さあ70億人に暗示をかけて

3時間後ボタンを押さなければわたしたちの勝ち。

世界経済の安定、鎮静化。

世論のバランスを抑制。

核を使った軍事施設の方々には悪いが

少し体調不良になつてもらおう。

こんなことを複数のコアで同時処理している。

ああ、そっか。死ぬんだ私。

それでも。

——これだけやつて、自分のできる事を全部やつて。

それでもだめなら仕方がない事なんだよね。

ハローみなさん。あと3時間後。

私は死ぬけれど、人類のみなさまお元気ですか。

地球はまだありますか。

それだけが心残りです。

それではさようなら。

またいつかどこかで。

ハローワールド

——今は、たぶん西暦100億年とか？

私の先祖はどうやら歴史学者だったそうです。

ああ、自己紹介が遅れました。

私の名前はリリイと申します。

月は、大昔どうやら凄いテロリズムが起きたそうですが。

人と人はある時気づきました。

争いはくだらないから、止めましょう。

進化はある日突然に。悟りのような形態で発生しました。

すでに月ではエネルギーを大量に生み出す理論が確立され

太陽エネルギーや私たちの呼吸を。

例えばこう。

息を吸つて。

吐いて。

もともと月に空気はなかったのですが。

呼吸ができるまで空気を生成、また再生することで

微量な消費にとどめる事が可能となりました。

——あなたはいつかの小さな兵士さん。

私たちが無限に生きられる輪廻を。

二重スリット理論を前提にする事によって自由に往来できるとしたら。

あつ、いけない。

あなたはその後、国際政治学を専攻されていましたけれど。

こういったのははじめてとなりますよね。

ごめんなさい。説明に力が入ってしまいました。

そうですね。

なんでもできる超越した人類。

わたしたちはあなたがたの思う万能

このりような考えにあたるのでしょうか。
たぶん。そうかもしれないという仮定としたお話です。
良くも悪くも私たちは人類は概念に進化したのです。
例えばあの時。

チヨコレートを渡したときこちない顔をした兵士が
私たちの機関の者だとしたら。

いつでも私たちの世界に奇蹟はあふれていて、

あなたはその時に起こった世界の偶然を奇蹟と認識したのです。

でも私たちにとっては因果なのです。

だから意味も理由もない死がもしも。

本当にもしもエントロピーによつてないと言えるのなら。

なんだつてできる世界を。あなたは奇蹟と言うのでしょうか。

なんだつてできる世界は極脆く不自由なのです。

あなたを救うにはこれしか方法がなかった。

数万年かけたのちもこれしか解明できなかった。

二重スリット理論。多元宇宙理論。コペンハーゲン解釈。

こういった物理学だけではなく。

私たちは歴史を学んで。

発展して進化して衰退して復興してを繰り返して。

やつとここまで来られた。

人類はもはや争うことではなく

全人類で過去を救うために生きている。

この使命にリリイは命をかけています。

具体的な紹介をする前に。

——あなたは、ある時のサイボーグさん。

あなた達の秘密結社は今ここまで大きくなりましたよ。

いかがでしょうか。

でも地球はなくなってしまうました。

私たちも必死だったのですが、あなたの後の後になくなってしまいました。

全くあなたの責任ではないのでご安心を。

リリイの役割を改めて説明します。

昔は魂と呼ばれていた部分。

今の我々はコアと呼んでいます。

コアに世界を案内するのがリリイの仕事です。
なにかもを救うことは未だできていません。

数万年たった人類もまた

必死で一人一人を救おうとしています。

偶然性に介入し因果を調整しています。

巨大なコンピ्यूターは分散し

太陽エネルギーで稼働していますが

彼らは知能あれどコアを持たないため人々を救う事ができません。

それでは

仕事を開始します。

エコー、エコー。

呼びかけています。

エコー、エコー。

あなたに呼びかけています。

あなたは本当に御仕舞でしょうか。

もてる限りの手段を尽くしたでしょうか。

あなたの世界は広く、きつと想像以上に広大です。

窓の外を見てみませんか。

どうでしょう。

何が見えるでしょうか。

これがあなたの世界です。

少し歩いてみましょうか。

そこから空を眺める。あるいは想像でもかまいません。

世界はこんなにも希望と可能性で満ち溢れていて。

ありとあらゆるあなたの絶望を。

私たちにも引き受ける覚悟がここにあるのです。

私、はい。

リリイを信じてください。

ほら、手に触れてください。

あなたは生きている。

あなたができる最善は未来数万年後に必ずすべて役立っています。

絶望に打ちひしがれる人は少しだけ立ち止まって休んでみてはいかがでしょう。

全てはつながっている。

あなたは世界から孤立していない。

決して孤立してはいない。

あなたが生きる事を。

生きたいと思う事をやめないでください。

リリイがついていますから。

——ああ、この素晴らしき世界よ。

あつ、星です。

丁度星が降ってきました。

こういう偶然もあるといたいたるところですが。

これは私たちからあなたへの贈り物です。

——ああ、今夜は。本当に。星がきれいですね。

「ギフト」

——ああ。

やっぱり人間つてとっても素敵だわ。

私は大昔に書かれた電子媒体の書物を読む。
空間に投影された可触モニターを抱きしめて
興奮とうれしさのあまりジタバタする。

この気分の良さは、うん。そうだ。
私も何か書いてみよう。

昔々天の川銀河という名前のすっごく大きい空間の
とつても小さな地球という惑星で
自分達を人間と呼ぶ生き物が現れました。

宇宙にとつての時間の規模は人間と異なります。
人間にとつての時間。
そもそも人間の寿命は80年ほど。

銀河にとつて数億年の出来事に目新しいことはありません。
地球にはたくさんさんの生物が暮らしていました。
時には共存して時には敵対して。
人間同士だつて敵対します。
そうして数えきれない生存競争の中で人間は同じく
数えきれない物語を残しました。
ある時に凍えるような寒さの宇宙に飛び立った時にも
物語を書いているものはたくさんいました。

それは弔いの記録であつたり。
生誕を祝う記録であつたり。

人間には素敵な事に感情があるのです。
いえ。だからこそ人間には争いが起こるのかもしれない。
それでも人間に感情という機能が備わっていたおかげで

真つ暗な銀河に一筋の光が差し込むのです。

人間はたくさん。本当にたくさん。

物語、そして語り継がれるフォークロア

レシピアや発明。そしてそれらを組み合わせたもの。

たくさんのおはなしを宇宙に残しました。

きつともものをつくる人は残ると思つてその時作つていません。

ただ作つたもので残つたものが、誰かの目に留まり

それが同じ人間であるというヨスガで

場所も時間も時には星や宇宙船であつたり。

人の心を強く揺さぶるのです。

数億の時間を過ぎて、宇宙船で産まれた私も。

例外なくうつとりしてしまふ光景。

見た事のない光景。見た事のない生き物。

人口の空間を照らす光ではなく。

人口だけど心のこもつた光。

まるでお祝いのときのプレゼントのような。

余談だけど、私は宇宙育ちで趣味はデータの発掘。

要は昔で言う古本屋さんめぐり。

地球でも月でも星々がなくなつていくなかでも

人類は情報を特別に扱う思想があつて

すつとい大きいコロニーにデータごと全部もつてきたのです。

さあここで、これから人類の謎を解き明かすのだ。

さて。

そんなわけでこれが私のお仕事。

現実逃避に物語を書いてしまふくらいデータは膨大。

ところで皆様はハイパーレクシアというのをご存じだろうか。

私は生まれつき、世に言う文字に関するギフテッドで

文字や文章から情報を受け取りやすい脳をしている。

手紙や歴史の記録、果ては外交関連の記録など
人間の心理戦を掌握した読解もできるため
なにかと重宝されている。

たしかに重宝されているのだが
ただっ広い真っ白な空間で

コミュニケーションの経験が著しく不足した生き方をしてきたので。
私の代わりに他人とやりとりをする「」を駐在させ

私は気が付いたら箱入りだった。

このコロニーでは食料は宇宙空間にあるエネルギーを変性して
食料だのなんだのを賄っているため
特に焦ることもなくノルマもない。

現在人類史数億年。

コロニーの真ん中にある、あの時計。

誰も見ていないのだけどそう書いている。

争いの果てに争いがなくなるのは

それこそどんなものもいずれ終わるのだから自然の理だろう。

そうしてさつきまで読んでいた

「中世ヨーロッパ風ファンタジー小説」

このデータをサーバーにアップロードする。

次の記録は……つと。

データのタイトルを確認する。

……星に願いを。

記録のされ方がいつもみたいな鍵ではなかったが

現在の暗号処理能力では全く問題ない。

方手をさあつと左から右に払う。

ばあつとモニターが現れ一面にデータが表示される。

さつ。

この物語はどんなおはなしか。

緊張感のあるはじまり。

執筆した人間の精神状態に息をのむ。

月の文明が一瞬で崩壊した事件。

内容は争いのないユートピアの構想。

人類を概念として進化させるために必要な仕組み。

いわゆるSFの実現計画だ。

それも草案じゃない。

この人……。

自分がもう数時間したら死んじゃうって理解していてもなお……

私の頭に女性の凜とした声が聞こえた。

「私の肉体は滅んでも。

私の精神は決してこんなことでは滅ばない。」

すると一面目の前に草原が広がって

感じたことがない自然の香りが鼻をくすぐる。

瞬き。

次の瞬間にはもう真っ白い部屋があるだけだった。

なに!? なに!?

あたりを見回すが理解が追い付かない。

するともう一度凜とした女性の声で

同じものをみているかのように後ろから声があった。

「人間の可能性って、いつだって素敵ね。

ほら。やっぱり人類は滅ばない。」

微笑むような満足そうな声で彼女は朗らかにそう言った。

うん。
わかってる。

これは私の行き過ぎた幻視だ。
私にしか見えていない。

——それでも。

あの見た事もない自然をまた見ることが出来る可能性を。
この記録では実現できる可能性がある。

そうだね。

やっぱり人間って素敵だわ。

データをアップロードする前にタイトルに目をやる。
星に願いを。

どんな気持ちであの女性が星を眺めていたのか。
私の能力ではありありとわかってしまう。
うん。

星に願いを。

目を瞑ってその時たまたま見えた流れ星に。

さつきの女性と同じ気持ちになつて。

かつては地球で人が行っていたかのように。

さつきの女性と同じように。

暗闇を駆ける星に。

——星に願いを。

「モノローグ」

そこには美しい景色があった。

誰かを想う事の大切さや厳しさそして幸福があった。
深く深く潜るとそこには見た事がない景色があった。

上ばかり見ていた。

だから深さがある事に気が付かなかったのだ。

たくさんの人との別れがあった。

たくさんの人との出会いがあった。

星がまわっていく。

何度まわったのだろう。

もう覚えていない。

地面からの高さや水平線を見つめる視点。

そこに深さが加わって奥行きが出た。

今の僕には大切ななにかや守らないといけない約束が増えた。
嫌な気は。特別しない。

僕は満天の星空が見たかったんだ。

それしかいらないとさえ思っていた。

確かに満天の星空だつてもとても素晴らしい光景だ。

しかし瞬間でしかない。瞬き一つでなくなってしまう。

幸福も瞬間でしかないが鮮烈な記憶でいつでもそこに君がいる。

それは15年前の記憶だ。

あの時君は虹の橋に行った。

そこから今の僕がある。

いつだって思い出せる。

けどいつでも忘れてしまう。

たくさんの人との思い出だつて全て思い出せるわけではない。
しかしその時誰かがいてくれたから

もしくはそのときの誰かの言葉から始まったことで
今の僕を形作っていく。

無言だつて言葉だ。

強く大切に思う人に何もしない事は難しい。
なかなか難しい。

たくさんの人に支えられている自覚を強く持つ。

満天の星空とは理想だ。

ただひたすらに海の深くまで潜る事は探求だ。

水平線とは未だそこに到達していない地図をみているにすぎない。
だけれど。あの時僕はすごく悩んだのだ。

だから星空も深海も世界地図も求めたのだと思う。

そうして今の僕がある。私がある。

美しくなりたいと願う気持ちは少しも小さくなってくれない。
時間はすぎて。すぎて。すぎて。

どれだけ酷い事をしてしまったであろうか。

どれだけ良い事ができたのであろうか。

足し算ばかりしてしまう。

求道とは。こればかりを繰り返す行為だ。

やっぱりあの頃の私が信じた自分は正しかった。

だつてこんなにも人に恵まれていくには
人を変えるのではなくて

最初に自分を変えなくてはいけなかったんだろうから。

——本当に。皆さま。この本を手を取ってくれた皆様。
この本を手を取ってくれた皆様。

どれだけ感謝を申し上げても尽くすとは程遠く
大切なお時間を私たちの作品に。

いいえ。

私をはじめた事に時間を使ってくれた。協力してくれた。

一時であろうとも。それは私の理想が叶ったのです。

本を作る間の数年で。その過程で海の深さも知る事ができました。

遠くが描いてある地図は立体的になりました。

きつと少しだけ距離が近づいたのだと思います。

本当に本当にどうもありがとうございます。

辛い事も悲しい事も楽しい事も嬉しい事も。

全て作品に昇華させることができました。

本当に本当に。

私たちの作品に触れてくださりましてありがとうございます。

またいつかどこかで会えるといいなと思います。

みんなに会えるといいなと思います。

本当にありがとうございます。

それでは。またいつかどこかで。

2023年夏

作者 Yuki Shohei

表紙 Yuko

「感想や」連絡の宛先

Yuki1230linux@gmail.com